
みんな恋してる。

桜桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みんな恋してる。

【Nコード】

N5988L

【作者名】

桜桃

【あらすじ】

ある日。

アメリカの留学生を迎えるのが新一に決定した。
3日には日本へ留学生と共に帰ってくる。

そこでアメリカの女の子は新一に

新一がいない間に転校してきた男は蘭に
恋をするのだった――

この話は、名探偵コナン 自作小説

にも掲載されています。

第1話 ことの始まり。(前書き)

書いてて、

面白くなりそうだなあ

と思っております。

と思うかは

人それぞれですが、

まずは、読んでみてください！

第1話 ことの始まり。

「——— ということで工藤。お前に決定した。」

「・・・は？」

それは、突然の出来事。

約、5分前。

「ええ、今年、アメリカにいる留学生をお迎えに行くやつが、うちのクラスに決定した。」

向こうには3日いてもらって、

そのあと、一緒に日本に帰ってきてくれ。

推薦でも立候補でもいい、誰かいないか？」

「先生！工藤がいいと思います！」

新一はただいま、熟睡中。

「だって、親は向こうにいるし、

英語だって、クラスで一番できるし、

ルックスもイケてるし、一番適してますよ！」

「おお！そうだな。」

「そ・れ・に。工藤君なら、

向こうで彼女をつくるとかの問題とかないしね！！！」

「斉に蘭のほうを向く。」

「え!？」

「うんうん。ということで工藤。お前に決定した。」

「は？」

新一はやっと、お目覚め。

—— ということ。

「まったく、勝手に決めやがって・・・」

「寝てたお前が悪い。」

「・・・。 後藤、お前が推薦したんだろうが・・・。」

「な、なんで・・・？」

「大体予想はしてたぜ・・・。」

「そっか・・・ま、毛利のことは、俺に任せて!」

「てめー!後藤!」

ギャー。ギャー。

「ったく、男子はうるさいわね。」

つと園子。

「ははは。」

苦笑まじりに笑ったのは蘭。

「でもさ、新一君に浮気って言葉はないから、大丈夫よ！」

「う、浮気って・・・」

「あつ。奥さんも疑ってなかった。って感じ？
うーん・・・愛はいいねえ。」

「・・・オバサン臭いよ、園子。」

「うるさいわね・・・」

女子は女子で盛り上がっていた。

そして、アメリカへ出発当日。

「蘭。3日なんてあつという間だから。」

「うん。」

「帰ってきたら、真っ先にお前のところいくから。」

「うん。」

「帰ってきたら、ハンバーグ。よろしくな。」

「うん！絶対、おいしくつくるから！」

「おお。楽しみにしてるぜ！」

「新一、体。気をつけてね。新一の我慢するのは新一の悪い癖だから。」

「お前に言われてもな……」

蘭は今にも泣き出しそう。

「わー！ごめんごめん！！わかった、わかったから。」

「ちゃんと、気をつけるから。お前も体に気をつけるよ。」

「うん。」

「毎日、飽きるほど電話してやつから！」

「えらそー……」

「なんだ？いやなのか？」

蘭がいやだといわないのを知っての意地悪。

「うっん。そんなことない！嬉しい。
楽しみにしてるから。」

「おお！」

「ロサンゼルス国際空港行きのお客様は
改札口の——」

「じゃ、行くから。」

「うん。がんばってね！」

「おお！」

——
ことの始まりは、
ここからきたとは、

誰が想像できただろう。

第1話 ことの始まり。(後書き)

うんうん。

大体ストーリーは固まっています。
どうやって文章に表そう・・・。
文章力がないもんで・・・
理解不能なこともあるかも！？
ご了承を。

第2話 新一 point of view (前書き)

がんばります!!

第2話 新一 point of view

ったくよー。

冗談じゃないぜ・・・。

3日も蘭と離れる！？無理に決まってるだろ・・・。

っと言いつつ。現在、ロスに居る。

「はあー。」

「しーんちゃん！」

「母さん・・・。」

「蘭ちゃんに会いたくしょうがないの？ったく、新ちゃんってば、わかりやすいんだからっ。かーわいーっ」

「やめろよ・・・。」

「あら、相当なショックなのね・・・。電話したら？」

「あっちは今、午前3時。寝てる蘭を起こさせていうのかよ？」

「そうね・・・。ま、新ちゃん。ここは我慢して！親子の絆でも深めましょうよ！ー！」

（高校生の息子と今更なにを深めってんだよ。）

「まーまー。そんな嫌な顔しないで！」

「それは無理な相談だな。」

「ひどーい。いいもん！蘭ちゃんに愚痴ってやる！
新ちゃんは蘭ちゃんが恋しくて、泣きそうだーってね！」

「あー！待て待て！！わかったから。」

「うん。わかればよし。」

畏にかかった。

俺は、どうも、母さんと園子みたいな類と灰原みたいな類は苦手だ。

蘭は・・・、叶わない。のほうが正確か。

—— その日は一日中、有希子のグチだった。 ——

「新ちゃん！3日間しか、通わないからって、手を抜いちゃだめよ
！」

「わあってるって！」

「浮気は・・・心配ないわね。」

「・・・。なに、心配してんだよ。」

「ごめんごめん!」

「じゃ、行くから。」

「いつてらっしゃい!」

がちゃ。

んー・・・。

別に悪くはない。

母親にああやって言われるのは、何年ぶりだろうか。

つと考えるつも、やっぱり、あの蘭の笑顔じゃないと、勇氣は湧かない。

はあ・・・

工藤新一です。皆さんの引率になりました。よろしく願いします。

留学生は、全員で5人。男子2人、女子3人。

工藤！俺はダッドだ。こいつはクリス。

よろしく。

よろしく。

ダッドはオレンジの茶混じりの髪が短くカット。スポーツマンタイプ。

クリスは髪が紫系の色で、ちょっとした、長髪。勉強真面目タイプ。

私、ジニー！この子は、エレナ。この子はリーナよ。

よろしくね。

よろしくお願いします。

ジニーは綺麗な金髪で、いかにも自分に自信ありますオーラが漂っている。

エレナは茶交じりの金髪で礼儀正しい。がり勉タイプ。「眼鏡はかけていない。」

リーナは上の方でちょっと短い髪を縛っている金髪頭。運動もできる。

ねね。新一って呼んでいい？

ジニーは新一に顔を近づけ、言う。

……。俺のことファーストネームで呼べる女は、
この世にただ1人なんだよ。

私じゃ、駄目？

ごめん、もう、決まってるからさ。

ジニーはショックを隠し切れない。

なんだ？彼女かよ。

ああ。

！！！！？？？？

冗談のつもりで言った、ダッド。

誰もが、まさか。っと思っていたが、俺の一言でその考えは外れた。

まじかよ……

ねね。どんな人！？

面白半分にリーナは聞く。

んー。これ言ったら、あいつに怒られるからやめとく。
でも、俺をここまで虜にできるのは、あいつくらいじゃねえかな。

この一言で、一同は皆静まり返った。

だが、リーナだけは、

へー。そうなんだ！工藤君がそこまで言っつてことは、
よほど、素敵な人なんだろうね。

新一は照れ笑い。

でも、リーナ以外は何もいえない。

ジニーが新一に一目ぼれをしたってことは、新一とリーナ以外知っていた。

（なんか、リーナちゃんって、蘭とかぶるんだよね……。
やべ、俺、どんどん弱ってやがる。
早く、蘭の飯が食いてえー……。）

「ま、3日くらい、どうってことないかな。」なんて、
のんきに思っている新一。

その、のんきさが、凶となるとは……。

第2話 新一 point of view (後書き)

の台詞は、

英語だと思ってください！

(本人は英語が書けなくて・・・)

ご了承ください。

第3話 蘭 point ot view (前書き)

楽しんでもらえると
嬉しいです♪

第3話 蘭 point o t v i e w

「はあ。」

気付いたら、ため息ばかりついている。

新一がいない教室は、こんなに広がっただろうか。

「蘭？どうした・・・あつ。新一君がいないからね。」

「そ、園子!!」

「ははは。やっぱ、凶星？」

「~~~~。」

何もいえなくなってしまう。

「照れない照れない。でもね、蘭。

3日後には戻ってきてくれるのよ？なにも、心配することないじゃない。」

「心配なんか、してないもん。」

「ま、要するに、蘭は新一君がなくて寂しいんでしょ？」

見抜かれた。

やっぱり、わかつちやうのかな？

「蘭ってば、わかりやすい。」

ま、そこが蘭のいいところでもあるんだけど?」

「?」

そして、

ガラッ

「席に着けー。転校生だ。入ってくれ。」

はいてきたのは、黒髪の男の子。背は新一よりちょっと、低くても、頭が良さそう。

「初めまして!松田浩二です。よろしくおねがいします。」

そして、人なつっこい感じ。

—— 休み時間

「ねえ、松田君って、どんな子が好み?」

「んー。あの子かな？」

蘭を指した。

その瞬間、沈黙ができる。

「え？どうかした？」

「松田、悪いことは言わねえ、毛利はやめろ。」

「？」

「そうよ、いくら美人でも、蘭だけはやめたほうがいいわ。」

「なんで？」

そのとき、

男女全員「工藤（君）の彼女だから！」

「工藤？」

「工藤はな、それはそれは恐ろしい男だ。
毛利に近づいた奴は再起不能。」

「蘭を傷つけた奴は、工藤君の完全犯罪間違いなし！」

「ま、まさか・・・」

男女全員「甘い!!」

「探偵の工藤新一を知ってるよな？その工藤新一が、工藤なんだよ！あいつは、毛利のことになると、冷静さを失い、なにをしでかさか、わかりやしねえ。」

「工藤君の信頼はあついから、他殺でも自殺といっても怪しまれない。」

「鳥取県警にすごいバカな警部がいるって聞いたんだけどな、その後に、俺がその気になったら、騙せるつってたし。」

「工藤君だから、すごいトリック考えて、迷宮入り！ってなるし。」

男女全員「だから、毛利（蘭）はやめたほうがいい（わ）！」

浩二は迫力負けしそうだ。

「でも、その工藤君はどうしたの？」

「留学生お迎え係さ。」

「え？」

「工藤は、頭はいいし、顔もいいし、スポーツもできる。だから、推薦で留学生のお迎え係となった。」

「へ〜。」

「松田君、ちょっといいかしら。」

園子が身を乗り出した。

蘭は話の内容が気になったが、聞こうとはおもわなかった。

それより、新一のことが気になったからだ。

「新一、早く声が聞きたい。」

昨日、別れたばかりなのに、こんなにも恋しい。

P R R R

着信。新一。

新一から電話が来た。

「はい。蘭です。」

『ハハッ。蘭です。って・・・』

「なによ。いいじゃない。」

この言葉に全員、耳を傾けた。

とっさに、園子が気付かれないようにスピーカーの部分を押した。

「どうしたの？」

『いや、蘭の声が聞きたくなつてさ。』

「……どうかしたの？ 新一。」

『相変わらず鋭いんだな。』

「つてことは、なにかあつたの？」

『あつたっーか。お前の顔が横にないのに
ちよつと、違和感かんじたっーか。』

「なにそれー。」

みんなは面白がつて聞いている。

いつの間にか、担任も聞いていた。

『いや、本当にお前の声が聞きたくなつただけだよ。』

「ほんとにー？」

『ほんとだって。』

「ま、いいわ。ね、そっちは順調？」

『まあまあかな。でも、仲良くはなっただぜ？一応。』

「なによ、一応って……。」

『気にすんなって！中道と後藤を組み合わせたみたいな奴もいるし、光彦の女バージョンみたいな奴もいるし、お前と歩美ちゃんを合わせた奴みたいなやつもいるぜ？』

「なにそれー。」

『でもさ、どんなに、お前に似た奴でも、お前じゃねえとやっぱ無理。全然満たされねえもん。』

「ハハハッ。なに言ってるんだか。」

『マジだぜ？やっぱ、お前の笑顔がねえと、やってらんねえもん。』

「私も、新一がいなくて寂しいよ？」

『そつか。なるべく、早く帰るから。』

「うん。帰ってきたら、新一の好きなハンバーグ作って待ってるから。」

『おう。よろしくな。』

「うん。」

『あ、蘭。』

「なに？」

『好きだからな。』

「・・・。うん、私も。」

『じゃあな。』

「じゃあね。」

ピッ。

誰もが共通として考えたのは、工藤（工藤君）のあんな優しい声、初めて聞いた。

ということと、帰ってきたら、思いっきりからかってやろう。

そして、やっぱり、夫婦だ。

つと。

先生も、ロスにいる新一を思いながら温かい目で蘭を見ていた。

それは、クラスの皆も同じこと。

——でも、

ただ1人、

おもしろくない人物が

いた。

松田浩二。

こ
い
っ
だ
け
が
—

第3話 蘭 point ot view (後書き)

携帯にスピーカーってありましたっけ？

私の記憶が正しかったら、

なかったような・・・。

たとえば、なかったとしても、

そこはスルーしてください(笑)

よろしく願います。

第4話 ジー
point
otview
(前書き)

まずは

みてください!!

第4話 ジー・ポイント・オブ・ビュー

—— 工藤新一です。皆さんの引率になりました。よろしくお願ひ
—— します。

かつこいい、男の子発見。

私の留学先、日本でのお迎え係さん。

でも、今回はただの体験留学。

彼のいる帝丹高校を体験するだけ。

それが終わったら、一旦帰ってくる。

——
でも。

彼女がいた。

ショックではない。

だって、工藤君を好きになったのは

ただ、彼がかっこいいから。

私の隣にいと、彼も引き立つだろうし、私も引き立つ。

私と工藤君。いい組み合わせじゃない。

彼女が居るなら、奪えばいいだけのこと。

なにも、難しいことじゃない。

今まで、私になびかなかった男はいなかった。

自信？そんなんじゃないわ。

本当のこと。真実なの。

くっとうくん[♪]

ジニーちゃん。

ん〜。その、ジニーちゃんってやめてくれない？
なんかイヤ。

・・・悪い。でもさ、呼び捨てにはできねえし。

ま、あせる必要はないわよね？

恋人になれば、自然と呼び捨てになるんだし。

まだまだ、先は長いもの。

そっか。じゃ、がまんする。

ほんと、わりいな。

ううん。

そして、私達は別れた。

そのとき。

ジーー。

ダッド？どうしたの。

お前に聞きたいことがあってさ。

なに？

工藤に本気なのか？

・・・。だったらなに？いいじゃない。

私に釣り合うし。工藤君だったら、彼になるための条件はクリアしてる。

工藤君だって、私が彼女で不十分なことはないでしょ？

おまえは、どうしてそう、見た目で判断するんだよ。

見た目は大切なもの。

俺が、お前のことすきだつて知ってるよな？

知ってるけど、彼方じゃ私の彼の条件には不十分なのよ。

スポーツはできるとして、顔は駄目。勉強も駄目。

私のだす条件は、工藤君みたいに、顔も勉強もスポーツもなににもかも

パーフェクトな男よ。彼方じゃないわ。

じゃ、用はそれだけ？私は教室に戻るわね。

ジニー・・・

あと、あの頃の私のこと、言ったら一生彼方を軽蔑するから。

わかってる。いわねえよ。

じゃあね。

そう、ダットじゃだめなのよ。

私の彼になる人はなにもかもがパーフェクトじゃなきゃ。

一つでもかけてたら駄目なの。

なにがなんでも、工藤君を手に入れる。

『マリア』なんかに負けない。

負けてたまるもんですか。

見返してやる。

あの男も。

私を捨てたこと。

私をばかにしたこと。

前の私よりも綺麗になった姿。

そして、

工藤君とラブラブになったところを見たら、

どう思っかしら？

想像しただけで笑えてくる。

——
今に見てなさい。

私はいつまでも

醜いジニーじゃないのよ。

そう、過去の私じゃない。
——

第4話 ジニー point of view (後書き)

ジニーには、

どんな過去があったのでしょうか？

その過去は、次のジニー視点で！！

見てくださいね ♪

第5話 浩二 point of view (前書き)

どんな思いが

あるのでしょうか？

←

←

← い覧下さい。

第5話 浩二 point o t v i e w

「松田、悪いことは言わねえ、毛利はやめろ。」

「そうよ、いくら美人でも、蘭だけはやめたほうがいいわ。」

「工藤はな、それはそれは恐ろしい男だ。
毛利に近づいた奴は再起不能。」

「蘭を傷つけた奴は、工藤君の完全犯罪間違いなし!」

「探偵の工藤新一を知ってるよな? その工藤新一が、工藤なんだよ!」

あいつは、毛利のことになると、冷静さを失い、なにをしかすか、わかりやしねえ。」

「工藤君の信頼はあついから、他殺でも自殺といっても怪しまれない。」

「鳥取県警にすごいバカな警部がいるって聞いたんだけどな、その後に、俺がその気になったら、騙せるつってたし。」

「工藤君だから、すごいトリック考えて、迷宮入り! ってなるし。」

ほんの数分前。

俺はこんなことを言われていた。

毛利さん――。

俺の頭から片時も離れない。

自慢じゃないが、

俺は、顔もいけてるし、スポーツも勉強もできる。

その――、工藤新一だっけ？

探偵だかなんだか知らないが、毛利さんの彼氏。

それも、恋人になる前からの『ラブラブ』らしいが、

そんなの、そいつが毛利さんの彼氏気取りをしてただけじゃないか。

幼馴染とか言ってたが、高校生にもなって、一緒に帰るか？普通。

しかも、異性同士だぞ！？　その、工藤ってやつは、高校１年で部活を辞めたらしいが、

部活をやっている毛利さんと帰るには待つしかない。

ってことは、あいつは毛利さんを待っていたということだ。

つまり、幼馴染を利用するちょっとしたストーカーじゃないか。

俺の中でいろんな理論がぐるぐるする。

クラスの奴らが言うには・・・

「え？工藤君？そりゃ、かつこいいわよー。蘭がいなかったら私、狙ってたし。」

「そうそう、探偵じゃなくても、ファンクラブは作られてたわよね
！」

「工藤？もー！あいつを思うとイラつくぜー！」

とちょっと期待した言葉も。

「あいつがサッカー辞めてなきゃ、今ごろ全国も夢じゃない・・・はあ。くそー！辞めやがってー！」

っということ。

「工藤はなー。一見クールな感じだけど、毛利のことになるとガキで、バカだよな。」

「うん。私が一年生の頃に思った印象と、同じクラスになっての印象が激変したわよ。」

「自分が頭良いつて自覚してねえし。」

「お金持ちってところ、嫌がるし。」

「なんつていうか、『名探偵』『救世主』とか聞いてると、遠い存在だけどよ、あいつはそんなこと一ミリも感じさせねえ。」

「蘭を守ってあげられるのは、工藤君くらいじゃないかな？」

っという言葉。

これは、嫌味か。

信じられないほど、いやな噂は聞けない。

それに、毛利さんの親友の鈴木さんに言われたあの、言葉。

「蘭を幸せにできるのは、新一君だけ。あなたが入る隙はないわ。わかったら、手を引いたほうが身のためよん？」

「は？」

「さっき、クラスの子が言ったことは大袈裟じゃない。全部本当よ。名探偵が殺人だなんて信じられないけど、蘭のことになると、その信じられないことは現実となるわ。そういう男なの。」

それに、蘭は蘭で、新一君をしたってる。

あの子は自分なんて後回しにして他の子を優先する子。

でも、新一君に対しては半端ないくらい、

自分を後回しにして、後回しにして・・・

それは、新一君も同じ。

あの2人にとってお互いの存在は酸素なのよ。」

「え？」

「なくてはならない。大切なもの。」

なくなってしまうたら、生きてはいけないもの。

わかつたら、身を引く。

これ以上続けて、再起不能になっても知らないから。

あ、後。女は見た目だけで判断したら怖いわよ？」

結局、鈴木さんの言ってる意味がわからず、

俺は置いてきぼり。

でも、今更後には引けない。

好きになってしまったんだから。

惹かれてしまったんだから。

その、工藤とやらが帰ってくるまで。

あと2日。

今更だが、毛利さんが工藤と電話していたとき、

見たこともない笑顔だった。

信じられないほど、魅力的だった。

そんな彼女の一面を見て嬉しかった。

——でも、

毛利さんをそうさせているのは、

あの男だ。

それが、気に入らない。

俺の中に嫉妬心が芽生える。

俺が彼女を笑顔にしたい。

俺が彼女を魅力的にしたい。

ただ、その一身だった。
――

第5話 浩二 point of view (後書き)

彼の嫉妬心が伝わるというかな。

新一には蘭を思う気持ちは負けない！

と

蘭には新一を思う気持ちは負けない！
つというジニーと浩二の気持ち。

そして、新一と蘭の甘甘を
楽しんでいただければ。と思っています。

話が変わりますが、

今日は弟&妹の運動会でした。

1年前までは通っていた学校も、

とても懐かしく思えます。

私に似なかった、足の速い弟の徒競走も

見もので、

私に似なかった可愛い妹のダンスも

見ものでした。

来年もこの楽しみが

味わえればいいな。と思います。

第6話 様子がおかしい&惚気（！？）（前書き）

蘭視点だと

書きやすいんですけどねえ・・・

第6話 様子がおかしい&惚気（！？）

「やってらんねえー・・・
蘭の飯が食いてえ・・・
蘭・・・蘭・・・」

教室なのにも関わらず、なんども繰り返してしまふ。

しかも、日本語だ。

え？なんて言っただい？

クリスに問い掛けられた。

いや、なんでもねえよ。気にしないで。

そうかい？

工藤君は、さっきからため息ばかりだったわね。
どうかしたの？

エレナが心配そうに見ている。

ま、元気だしな！彼女に会えなくて寂しいのはわかるけど、
ため息ばかりついてても、なにも始まらないよ！

こういうところが

蘭にかぶるのだろうか。

新一は黙ってしまふ。

どうしたの？工藤君。おい。

どうしたんだ？

ダッド聞いて！工藤君が硬直状態なの。

工藤が？

どうしたの？

ジニー！工藤君がおかしいの！！

ったく、だらしないわね。工藤君、大丈夫？
ほら、起きて！

優しい微笑で言うジニー。

するといきなり、

そんな奴ほつとけよ！

ダッド？

どうせ、彼女のことを考えてんだろ？

あきらかに、ダッドの様子がおかしい。

どうしたの？ダッド。彼方らしくないわよ。
落ち着きなさい。

余計なお世話だね。エレナの優等生振りには呆れるぜ。

ダッド！そんな言い方はないんじゃないか？

クリス。お前もだ。正義ぶるのもいい加減にしてくれ。

ダッド、彼方なんか変よ？

・・・。元はといえば、ジー、お前のせいなんだからな。

そういうと、ダッドは教室を出た。

おい、ダッドはどうしたんだ？

ことの成り行きの原因者の

新一は訳もわからず呆然としていたが・・・

それがわかったら苦労しないわ。

私のせいとか言ってたけど・・・心当たりがないわ。

と、言われてしまった。

過ぎ去ったことは気にしない！

ねね、それより、工藤君の彼女を知りたい！！

え？

ね、ジニーも気になるでしょ？

リーナは何も知らない。

新一をすきだということも。

ええ。是非聞きたい。

つとジニーが言うと、

クリスもエレナも

聞きたいと言う。

はあ。しょうがねえな。

つと言ってみる新一も、まんざらでもない。

んつとまあ・・・怒りつぱくて、泣き虫でお人好しで、
でも、人のためなら命を張ってでもがんばって、
俺が命をかけてでも守りたい奴。
あいつが居なかったら俺、生きてらんねえもん。

幸せそうに微笑む新一。

工藤君って意外と一途なのね。

工藤君の意外な一面発見！！

彼女は幸せなんだろうね。あ、そうだ工藤君。

僕ね、黙ってたんだけど、少しは日本語がわかるんだよ。

「え！？」

？

リーナとエレナは？マークを描いている。

今、え？って言っただろう？

あ、ああ。

喋ることはできないんだけど、読んだりすることはできるんだ。
勿論、話していることもわかる。

だから、さっきのやってらんねー。っていう発言も、ばっちり聞
こえてた。

うそだろ……

僕、嘘は嫌いなんだ。

はあ。

まあまあと、クリスは新一を慰める。

すると新一は、ふと思い出したようで、

（ん？待てよ。お前・・・まさか・・・

あ、うん。彼女の名前を何回も言ってること
とかなら聞いたよ？

うわああ、まじかよ。

まじだよ。

ねえ、聞いた！？

工藤君ってば、ラブだねえ！

ちょっとやめなさいよ、リーナ。

え？なんで？

エレナが何故、リーナを止めたかというと、

すごい剣幕でジニーが睨んでいたからだ。

これにはリーナも黙ったが、

なにも知らない新一は酷なことに、

惚気前回だ。

いくら、奪うと自信があっても、

幸せそうに彼女の話をしていて平気な訳がない。

（なによ、なによ！

私が負けるはずが無いの！不安にならなくていいの！

でも、なんで・・・なんで、こんなに不安なのかしら。）

ジニーは一人で悩んでいた・・・

三二 オマケ

あのね、リーナ。

ジーは工藤君がすきななのよ？

え、ええええええええええ！！！！！！

ちよつと、そんなに驚くこともな．．．って、
もしかして、気付かなかったの？

気が付かないわよ！そりゃ、いつも以上にお色気ビームきかせてたけど・・・

まさかそんなこと……って思ってた。

まったく、ここまでの鈍感是世界中どこ探してもいないわよ？

いや、蘭という例もあるのだが……

だ
っ
て
・
・
・

わかったら、今後は控えるのね。

あまり、工藤君に彼女の話させたら

ジニーはどう思つかしら。そういつことも考えて。

はあい。

律儀に手まで挙げて返事をしている。

よし。じゃあ、クリスと工藤君のところへ行きましょう。

うん！

っという会話をしていたのだった。

第6話 様子がおかしい&惚気(！？)(後書き)

普通にいろんな人視点でいこうかと

思ったのですが、

やめました！(笑)

今みたいに、

変更することが度々

あるかと思っています。

ご了承ください。

第7話 男の友情（前書き）

恋愛ものって

簡単そうに見えて

実はすごく難しかったり

するんですよえ〜。

第7話 男の友情

ダッド！どうしたんだよ。

最近おかしいぞ？

お前はいい気なもんだ。何の苦勞をしなくても女に好かれ、勉強もなにもかもできるんだもんな。

は？

どうせ、今の彼女だって告白されて

成り行きで付き合ってたんだろ？探偵としてだって、警察の力をかりて解決してだろ？

ダッドは言うてはならない禁断の言葉の一つを

言ってしまった。

バンッ！

新一はダッドを突き飛ばした。

苦勞もしてねえ？

そつかもな、生まれてきてからなにも苦勞せず、やってきたよ。

おまえ・・・！

だがな、俺が付き合ってる奴は

俺から告白した、

小さい頃から好きで好きでたまらねえ奴なんだよ。

正直、いつ嫌われっかって、いつも不安さ。

探偵やってるときだって、確かに警部達の手も借りてる。
でも、中途半端にやってるつもりわねえんだよ。

・・・

お前がなんで怒ってつかわかんねえけど、

俺が苦労してねえなんて、ただの見間違いじゃねえ？

付き合ってる奴は、強くて、いじっぱり。

しかも泣き虫ときた。俺がどれだけ苦労してるか・・・

買ひ物の荷物もちだろ、なにかあれば奢りだろ？

はあ。参るぜ。

・・・。

それを知ってる奴にはさ、

あら、流石の名探偵さんも愛しの彼女には叶わないのね。」「by
哀」

なんて言っただぜ？腹立つたらなんの。

ぶはっ・・・なんだよそれー！

だろ？しかも、そいつは天才科学者でさ、
実験台になつてくれてもかまわないとか、ハンドバック
とか要求するし。

何歳だよ。

まあ、19歳と・・・8歳？かな。

はあ？何言つてんだ？

（しょうがねえじゃねえか。本当の姿だと19歳。
灰原だと8歳なんだからよー。
なんて、言えねーけどな。）

悪かったな。工藤。

ジニーがお前を好きなもんだから
妬いてたんだよ。お前も知ってるんだったら
ジニーに期待させんなよ。

・・・期待も何も、ジニーちゃんが俺を？ないない。ダッド、お前なにか勘違いしてるんじゃない？

新一は笑う。

・・・
お前、鈍感か？

鈍感？んなわけねえよ。

お前がジニーちゃんをすきだって知ってるし。

うそだろ！？／／／／

（こいつ、もしかして、自分のことには鈍感ってことか？）

工藤の彼女は苦労すんな。

・・・。

ああ。苦労してるさ。

え？

俺が探偵として夜遅くに帰っても、
必ず家にいて、ご飯を作って待っててくれる。
俺がどんなに救われてっかわかんねー。

どうやら、新一は違う意味にとらえたらしい。

アイツは人に心配かけんのが嫌いだから
決して弱みを見せねー。
俺としては見せてほしい。っていうのが本望だけど、
俺も弱みを見せねーから、言えねえんだよな。

ダッドも真剣に聞いていた。

俺が高2るとき、音沙汰無しで
姿を消したとき、信じて待ってくれたのは
他でもない、あいつだった。
それが、俺にとって支えになったし、
あいつの笑顔で勇気もでた。
俺さ、あいつにお前が居ないと生きてらんねえ言っ
て大袈裟って言ってたけど、本当に生きてらんねえだよな。

蘭が、毛利蘭っていう存在が俺という工藤新一っていう存在をつくってくれた。あいつがいなかったら、今の俺は居ねえと思う。

本当、あいつのおかげでどんなに救われたかって聞かれたら、数え切れねえほどとしか、言いようがないくらいなんだ。

そっか・・・

P R R R R

わりい。出るな。

ああ。

もしもし？

『ら、蘭です！』

「・・・蘭ですって・・・」

『だって！。英語なんだもん。びっくりしちゃった。』

「わりい。誰かわからなかったからさ。」

『もお。』

「それにしても、お前からかけてくるなんて珍しいな。」

『私だって新一の声が聞きたくなることだってあるもん。』

「そっか。」

新一の顔が優しい眼差しへと変わった。

まさに、蘭が目の前にいるかのような眼差しで。

「蘭、こっちが夜中でも、声が聞きたくなったらいつでも電話してこいよ。」

『え？ それは駄目よ。新一には安眠してほしいもの。』

「安眠って・・・」

『こつちきたら、眠れない日々がまた続くかもしれないでしょ？だから、少しでも寝てほしいの。』

「・・・わかった。」

でも、帰ったら真っ先にお前んところ行くから。
俺のわがまま。聞いてくれよな。」

『わかった！なんでも、してあげるからね！！』

「じゃあな。」

『うん！』

ピッ。

お前、彼女を愛してますって顔してたぞ。

そうか？ま、世界一愛してる奴だからな。

・・・認めやがって・・・

少しは慌てるよな。面白みがねえ。

からかわれるのは慣れてるんでね。

は？

いや、こっちの話。

そつ、新一はクラスの皆にからかわれており、

そこに教師も入り、

しかも、蘭の親友。

園子という強敵（？）もいるわけだ。

工藤ー！

留学の引率先生が呼んだ。

じゃ、俺、行くから。

おー。

新一は掛けて行った。

そっか。

ジニーがとられる心配はなくなったわけだ。
よし、地道のアタック、

がんばるとするか。

つとダツドが漏らしたこの一言を

聞いているものは

誰一人いなかった。

第7話 男の友情（後書き）

灰原「くしゃん！」

桜桃「大丈夫？」

灰原「なんか、さつきからくしゃみが
とまらないのよね。」

桜桃「あー！さつき、

新一たちが会話してたとき、
哀ちゃんの話がでてきてたしね。」

灰原「なんですって？

あの人、なんて言ったのかしら。」

桜桃「あー。もしか、

実験台にしちゃったり・・・。」

灰原「内容によつては、そうなるかもね。」

桜桃「新一、桑原桑原・・・。」

灰原「楽しみね。工藤君の実験。」

新一（ぞわああ。

なんか、悪い予感するんだけど・・・
気のせいかな？）

次回もよんでくださいね♪

第8話 悲劇

過去編 1

(前書き)

ジニーの過去が
明らかに！！

第8話 悲劇 過去編1

あれは、今から3年前のこと。

えー！？ジニーってダニエルがすきななの？

うん。でも、秘密だよ？

そのころ、私はおしゃれに興味も無く、

いまどき考えられないほどのダサコだった。

唯一の救いといえば、綺麗な金髪と長いまつげだけ。

あとは、髪の毛もゆるく結ぶだけで、

服装も楽なジャージ系で、

本当にダサかった。

でも、ダニエルって学校一のモテ男でしょ？
大丈夫なの？

正直、自信ないんだけどね。でも、がんばるよ！

小学校からの親友のマリアはいつも相談にのってくれていた。

マリアはとっても美人。きれいな茶色の髪が綺麗にくるんと巻かれています、

お人形さんみたいな子。

こんなマリアだから、私の好きな人はマリアを好きになっていった。
しょうがないこと。そう思ってる。

私はいつでもジニーの見方だからね。
応援してるよ！

ありがとう。マリア。

マリアは優しい。

いまどき、顔も内面もパーフェクトな女の子がいるだろうか。

でも、マリアのほうが、ダニエルと釣り合うよね。

バカなこと言わない！見た目なんか関係ないわよ。
だって、ジーにはジーの良い所があるでしょ？

マリア・・・

くよくよしても始まらないよ！

うん！そっだよね。

＝告白＝

私ね、ずっとダニエルが好きだったの！
よかったら、付き合ってください！！

・・・。

いいよ。よろしくね。

ありがとう！

やった。

マリアが応援してくれたおかげだ。

すぐに報告しなきゃ！！

マリア！

マリア！

マリア！

．．．どこにいらっしゃるう。

裏庭をでたところで。

いた！

マリア！

あら、ジニー。

じゃあね、エミリー。

今度はエマを入れて話しましょう。

ええ。

なんだか、楽しそうだった。

それに、最後にエミリーがこっちを見て笑ってたし・・・

なんだろう。

ジニー。

どうしたの？

あのね！ダニエルが告白OKしてくれたのよ！

え？

え？ってなに？

あ、ごめんなさいね。
驚いたもんだったから。

い、いいよ！どうせ、私だしね。驚くのも無理ない。

そんなことないわよ！ダニエルがOKしてくれたってことは、
ジニーに隠された魅力を見つけてくれたってことでしょ？
もっと自信をもって！でもね、これからが大変よ？

ダニエルファンになにされるかわからないわ。がんばってね。

うん！ありがとう。

ジニー。

ん？

今後、がんばってね。

う、うん？

——今後？——

じゃ、私先生に呼ばれたから。

ん。聞いてくれたありがとう。

いーえ。私達の仲でしょ？

うん！

でも、私は知らなかった。

この会話が、

私の人生が狂う最初の予言とだとは。

しかも、私が一生立ち直れない

牢獄へと葬り去られることになる・・・

第8話 悲劇 過去編1（後書き）

ジニー 私の過去が明らかになる！？

ちよつと、工藤君にはばれてないでしょうね！？

桜桃 「なんて言ってるかわからないのですが・・・

あ！こんなときこそ、哀ちゃん！！」

灰原 「呼んだかしら？」

桜桃 「通訳よろしく！」

灰原 「え？ええ・・・」

ジニー 私の過去は工藤君にはばれないのよね！！

灰原 「この人、過去を工藤君に知られたくないみたいよ。」

桜桃 「なんだ。そんなこと？大丈夫って言うておいて？」

灰原 安心してちょうだい。大丈夫らしいわ。

でもね、貴女の恋が実るとは限らないわよ？

ジニー え？

・・・

次回は、ジーがどうなるのか。

必見(?)です！

第9話 悲劇 過去編2 (前書き)

更なる悲劇・・・

第9話 悲劇 過去編2

ジニー！一緒に帰らないか？

うん！

3週間前に告白して付き合うことになった

学校一の美男子。ダニエルが迎えにきた。

私も一緒にいい？

マリアがきた。

正直、二人で帰りたい。でも、ダニエルと付き合えるようになったのは

マリアのおかげだもんね。

うん。いいよ。ね、ダニエル。

う、うん。

キャハハハハ！ダニエルおっかしー。

そうかい？

ダニエルって・・・私の彼氏よね？

周りから私を見たこの図は、

恋人の後ろをほつつき歩いてるようにしか見えないじゃない！

ダニエル！

なんだい？ジニー。

マリアと私、この角でお別れだから。

そうなのかい・・・いや、残念だよ。

今の残念は・・・私に対して？それとも・・・マリアに対して？

じゃ、ダニエル！！

じゃあね。マリア！

ばいばい。ダニエル。

ばいばい。

やっぱり、ダニエルもマリアを好きになるんだろうか。

私は、不安を抱えながら

帰った。

翌日。中休み

いつけない！ノート忘れた！！

キャハハ！

??

教室が騒がしい。

もう！ばかね。ジニーは

わ、私！？

この声、エマね。

そうよね。

この声はエミリーね！もう、最悪！！

でも、本当？ジニーの好きな人を取ったって。

！？！？！？！？！？

好きな人を取った？誰が！？

本当よ。あともう少しでダニエルも手に入りそうなの。

え
—
？

この声は・・・

—— マリア…… ——

悪人ね。マリアったら。

それほどでも。

でも、あのジニーの顔ったらおかしいのなんの！
私に取られたのを知らずに、

マリアは美人だから なんていうんだもの。
私、ああやって何の努力もせずには自分は悲劇のヒロインみたいな

人、

だいつ嫌いなのよね。

——
だいつ嫌いなのよね。

——
嫌いなのよね。

マリアの言葉が私の頭の中をぐるぐると駆け巡る。

うそ・・・だよな？

私達、親友よね？

お願いだから、嘘だといって。

お願い、マリア――

第9話 悲劇 過去編2 (後書き)

なんと、

マリアの裏切り!!

マリア ダニエルまで取られたジーはどうなるかしら？

桜桃「まさに悪女だわ・・・」

マリア どうせまた、しょうがないと思うんでしょうけど。
本当、そういう女ってむかつくのよね。

桜桃「なんて言ってるのかわかりませんが、
大体理解できます。

皆さんも、身近にこういう人が
いたら・・・

また、私の親友が・・・
つという場合。

あなたならどうしますか??」

第10話 悲劇 過去編3 (前書き)

第10話 悲劇 過去編3

足元がふらつきながらも前を歩く。

だよなー。

ガヤガヤと不良軍団の声。

マリアって可愛いよな！

いーな、ダニエルってばマリアと
付き合ってたんだろ？

ばーか。ちげえよ。ダニエルはマリアの
友達・・・えっとジニーだったわけ。
そいつと付き合ってたって。

はー！？ジニー？まじウケル！！

むっかー!!

なによ、ダサいからって！

でもよー、俺が聞いたのは
ダニエルの本命はマリアって聞いたぜ？

え――。

あ、俺も聞いた！

マリアって学校のマドンナだろ？
いくらダニエルでも自信なかったみてえで、
告白してきたジニーをつかったらしいぜ。

うそ・・・

ダニエルが？

そんなはずない。

ただの噂よ噂！

私はひたすら走った。

着いたのは、学校の裏庭。

お前、今日彼女はとうしたんだよ？

彼女？ああ、ジニーのことかい？

ああ。

彼女っていうのはただの名だろ？僕はあいつを
本命の彼女にしたつもりはないね。

え？

本命はマリアなんだから。

マリアと仲がいいのはジニー
だからジニーに近づいたのか。

しょうがないだろ？ジニーは彼女というなの
『道具』なんだからさ。

道具？

そう。ジニーはマリアを彼女にするための
ただの道具に過ぎないのさ。

へえ。

まあ。道具っていうても、マリアを
手に入れたら用済み。

いわゆる、使い捨て式の道具だね。
とっても便利だよ。

かわいそうに。

だったら君が彼氏になってあげるかい？

まっさかぁ。

・
・
・

冗談だろ？

冗談だよ。

驚かせんなよぉー！

げらげら笑っている。

——サイテー！サイテー！

女をなんだと思ってんのよ！

友達を何だと思ってんのよ！

人間を何だと思ってんのよ！

マリアといいダニエルといい

美形って、ろくでもない奴なのね！！

顔がよかつたらそれでいいわけ！？

憎い！憎い！

私をこんな目に合わせたあいつら！！

復習してやる。

覚えてなさい。

私の復習は甘くないわよ。

一発で傷つく

そんな作戦をこれから考えて

実行するわ。

貴方達がやったように、

私もやってやる。

最初にやったのは貴方達。

文句いわれる筋合いないわよね？

美女？美男？

ただ美形だからって

なんでも許されると思ったら大間違いよ。

今はとってもいい気分にさせてあげるわ。

騙された振りをしてあげる。

マリアにはダニエルを

ダニエルにはマリアをプレゼント。

上手く私を騙せた2人は思いつきり私をあざ笑うでしょうね。

それでいいのよ。

今はその爽快な気分を楽しめばいいわ。

だって、これから

地獄へと落とされるんだから

第10話 悲劇 過去編3 (後書き)

ひゃあああー!!!

最初は蘭みたいな性格だったジニー。

あの性格が生まれたのはここから！

これで、何故、

私の彼になる人はなにもかもがパーフェクトじゃなきゃ。

という考えが生まれたのかおわかりになられたでしょうか？

では、次回へ。

第11話 ドッキリ!?(前書き)

ドッキリとは!?

第11話 ドッキリ!?

「かつたり〜。」

「おかえり!新ちゃん♪」

「どうしたんだ?母さん。」

「なんでもないわよ!」

(まあ、今日が特別変ってことじゃねえし。)

そう、有希子が変わたということは今に始まったことではない。

「まあ、まあ。そんな辛気臭い顔しないで!」

がちゃ

おかえり！工藤君。

おそかったな。

まちくたびれたわよ。

まあまあ。

おつかれさまです。

なんと、

ダッドにクリス。ジー、リーナ、そしてエレナまでもが
勢ぞろいになって新一を出迎えた。

「な、なんで？」

「新ちゃんが最近元気が無いつて来てくれたのよ。」

まあまあ。ごちそうもあることだし！食べよう！！

あーっとその前に、新ちゃんにプレゼントがあるの。
なにかな？

皆は初めて見るわ。新ちゃんは飽きるくらい見てた。
なんだろうね。

ええ。

一同は興味がわいてきた。

出されたのは、

———大きな箱———

「なんだよ・・・これ。」

「プレゼント♪開けて開けて!!」

「あ?ああ。」

「はか。」

「新一、久しぶり。」

「ら、蘭!？」

「私から最愛なる息子へ最愛なる人との時間をプレゼントよ。」

「母さん……」

「ほら、向こうの部屋に行って話さないよ。」

「さんきゅー!」

蘭は軽くお辞儀をして新一と共に行った。

そして

新ちゃんの恋人よー！可愛いでしょ？？将来、私の娘になる子なの！！

料理はできるし、美人だし、もー、新一にはもったいないくらい！新ちゃんよりも大好き！！

おいおい、親がそんなんでいいのか。

っと思わずつつこみたくなるこの言葉も、

新一の恋人を見た。

という事実を未だに理解できていない一同は

有希子の言葉など一ミリたりとも

聞いていないのだった。

第11話 ドッキリ!? (後書き)

O r c h i s A p p e a r a n c e ! !

蘭 登場!!

英語を使ってみました!!

でも、登場の部分が日本語に直すと外観
つとなってしまう。

多分、意味はいいしなので!!

第12話 ドッキリ!?

新 point of view

(前書き)

新一と蘭の会話!!

新一視点です♪

第12話 ドッキリ!?

新 point of view

「蘭。」

「？」

「2日間。すっげー寂しかった。」

「私も。私も新一がいない教室は寂しかった！」

「そっか。あ、蘭、お前いつ帰るんだ？」

「新一が帰るとき。」

「まじで？」

「うん。」

「よっしやー！」

「??どうしたの?」

「いや、これから帰ってきたら蘭の顔が見れると思うとき、嬉しくなっちまって。」

「私も。」

そういえば、

蘭に変なむしはついてないよな?

正直不安になる。

転校生が来たと聞かされたときはあせった。

男か女かは聞いていないが、女であってほしい。

男であってもクラスのやつらはとめてるだろうか。

「な、蘭。転校生が来たんだってな。男か？」

「うん。そうだよ。松田浩二君っていうの。」

新一がいなかったら学年一のモテ男だったんじゃないかな？」

「ま、まさかお前、アプローチとかされてねーよな？」

「されてないよ。移動教室のとき、一緒に行こうとか言ってくれるけど、

でも、園子も一緒だし。」

「ばかやろー！あのな、それはアプローチをするまえに
まず自分を知ってもらおうって魂胆だ！」

蘭の鈍感は今にはじまったことじゃないが、

この鈍感さには毎度毎度呆れる。

「そうなの？」

「園子に聞けばわかるぜ？」

「そうかなあ〜?」

「ま、いや。」

この鈍感なところを見ると、そんなに深く仲いいところ

まではいっていないみたいだ。

まず安心していいでしょう。

あとはその男をちょっと脅せばすむことだ。

「新一?」

「あ、わりい。」

「な、蘭。」

「？」

「俺と一生一緒にいてくれるよな？」

「なーにそれ。あたりまえよ。一緒にいるに決まってるじゃない。」

「お前がいやだつっても、俺はお前の手。放せねえからな。覚悟しとけよ？」

「私だって。新一が別れたいって言っても別れないからね！」

どつから俺が別れるなんて言うという発想がでてきたのだろうか。

「俺が別れるなんて言うわけねえだろ？」

「なら、いいけどー？」

「疑ってるのかよ。」

「べつつにー。でも、コナン君のときみたいに「ただの幼馴染だ！それ以上の感情なんてねえよ。」って言わないでよね！」

「あれは・・・ちよつとした照れ隠しで・・・
だって、あそこには灰原も博士もいたんだぜ？」

「でも、ショックだったのは事実だもん。」

頬を膨らませちよつと涙目。

こんな顔でさえ、可愛いと思ってしまう。

まじで俺、重病だ・・・

「悪かった。これからはちゃんと言っから。いいだろ？」

「うん！」

「ね、新一。」

「あ？」

「私、とーっても幸せ！」

「ああ！俺もだよ！」

ちょっと驚いてしまったが、俺はちゃんと答えた。

だが

「私は新一の十倍幸せだもん！」

「はあ？俺はその百倍だね。」

「千倍！」

「一万倍！」

「百万倍！」

「千万倍！」

「はあはあはあ。」

息切れ。

「ぶつ。あはははは。」

顔を見合わせ、笑った。

隣にいるということが当たり前じゃないと、

一緒にいるだけで幸せだと

コナンのときあんなに思い知らされたのに、

まだ、甘い部分があったみてえだ。

2日間あわなかっただけでこんなに

ものたりない。

「俺はお前が
いるだけで幸せだから。」

「私もだよ。」

それから

俺たちは一晩中話した。

たった2日離れただが

俺にとっては2年もはなれたように思えたんだ。

第12話 ドッキリ!?

新point of view

(後書き)

Shinichi & Orchis
love love!!

新一&蘭 ラブラブ!!

今度は蘭視点でいこうと思います!

第13話 ドッキリ!?

蘭 point of view (前書き)

蘭ちゃん視点です♪

第13話 ドッキリ!?

蘭 point of view

「蘭。」

大好きな優しい声で呼んでくれた。

「？」

「2日間。すっげー寂しかった。」

すごい！同じ事を思ってた。

「私も。私も新一がいない教室は寂しかった！」

「そっか。あ、蘭、お前いつ帰るんだ？」

「新一が帰るとき。」

「まじで？」

「うん。」

ちょっと間が気になった。

もしかして・・・迷惑とか？

「よっしゃー!」

「???どうしたの?」

「いや、これから帰ってきたら蘭の顔が見れると思うとさ、嬉しくなっちまって。」

「私も。」

同じ事を考えていてくれたいた。

どうしよう。

とんでもなく、うれしい。

すると突然。

「な、蘭。転校生が来たんだってな。男か?」

どうしてそんなことを？

っと思いつつ答えた。

「うん。そうだよ。松田浩二君っていうの。

新一がいなかったら学年一のモテ男だったんじゃないかな？」

「ま、まさかお前、アプローチとかされてねーよな？」

アプローチ？まっさかあ。

私が???と内心思った。

「されてないよ。移動教室のとき、一緒に行こうとか言ってくれるけど、

でも、園子も一緒だし。」

「ばかやろー！あんな、それはアプローチをするまえに
まず自分を知ってもらおうって魂胆だ！」

いきなり怒鳴られた。

え？知ってもらう？魂胆？

「そうなの？」

「園子に聞けばわかるぜ？」

「そうかなあ？」

「ま、いや。」

勝手に納得している。

ちょっと気になるけど、

新一がいいならいいや。

今は新一と会えるだけで嬉しいもん♪

「新一？」

「あ、わりい。」

「な、蘭。」

「？」

「俺と一生一緒にいてくれるよな？」

一生？

「なーにそれ。あたりまえよ。一緒にいるに決まってるじゃない。」

「お前がいやだつっても、俺はお前の手。放せねえからな。覚悟しとけよ？」

「私だって。新一が別れたいって言うっても別れないからね！」

いつも聞きたかったこと。

それに、一生って遠まわしのプロポーズだって思って

いいんだよね??

「俺が別れるなんて言うわけねえだろ？」

「なら、いいけどー？」

「疑ってるのかよ。」

「べつにー。でも、コナン君のときみたいに「ただの幼馴染だ！それ以上の感情なんてねえよ。」って言わないでよね！」

そう、あれは相当ショックだった。

「あれは・・・ちよつとした照れ隠しで・・・
だって、あそこには灰原も博士もいたんだぜ？」

「でも、ショックだったのは事実だもん。」

ショックでショックで

新一にとって私はその程度だったんだ・・・

って本気で思った。

「悪かった。これからちゃんと言うから。いいだろ？」

「うん！」

約束してくれるんだよね。

「ね、新」。

「あ？」

「私、とーっても幸せ！」

「ああ！俺もだよ！」

今言えることは精一杯の気持ちをこめて

言いたい。

でも、私のほうが新一より思ってるわよね？

コナン君のとき、待ってたのは私だし。

「私は新一の十倍幸せだもん！」

言ってみた。

すると新一は

「はあ？俺はその百倍だね。」

「千倍！」

「一万倍！」

「百万倍！」

「千万倍！」

「はあはあはあ。」

息切れ。

「「ぷつ。あはははは。」」

笑った。

ばかみたい。

なにしてんだろ。

でも、

これが幸せつてものだよね。

当たり前じゃないもんね。

コナン君になっちゃったとき、思い知らされた。

でも、そのことがあるから、私は新一への思いをさらに深く

することが出来たんだと思うし、

今の私達があるんだと思う。

「俺はお前がいるだけで幸せだから。」

新一が言ってくれた。

「私もだよ。」

私も言った。

たった5文字だけど、心をこめて。

私達は一晩中話した。

まるで、2年も離れたかのように話は尽きることがなく、

楽しくいっぱい話した。

コナン君になっちゃったときのほうがいっぱい離れてたのに、

それよりも短い2日間でそのときよりも離れるのが苦しい。

だから、手を離さないって言うてくれたときは

とっても嬉しかった。

第13話 ドッキリ!? 蘭 point of view (後書き)

浩二「なんか、僕の出番が少ないような・・・」

桜桃「だって、2回しか出てませんもん。」

浩二「・・・」

桜桃「すねない、すねない。大丈夫。あと1話か2話
書いたらでるとおもっから」

浩二「おもっ？」

桜桃「えっと、次回はジニー視点です。
お楽しみに!!」

浩二「ごまかした・・・」

桜桃「♪」

第14話 ドッキリ!? ジーpoint otview (前書き)

—— 初めて気付いた・・・
好き。

貴方を、
恋愛対象で好きです。——

誰の心理でしょう!?

第14話 ドッキリ!?

ジーンpoint
otview

工藤君の彼女が現れた。

悔しいけど、美人。

親公認の仲みたいだし・・・

そしてなにより、今まで私達に見せたことのない

工藤君の

優しい笑顔。

そして、声。

私達には一度も・・・見せてないもの。

2人は奥へと行ってしまった。

とっても気になる。

私達は中をのぞき、様子をつかった。

「蘭。」

日本語で何を言っているかわからない。

でも、日本語がわかるクリスが通訳してくれた。

どんなことを言っているか気になってしょうがなかった。

聞かなくてよかったと後悔するまでは――

「2日間。すっげー寂しかった。」

なんか、工藤君。彼女に会えなくて寂しかったみたい。
たった2日間はなれてただけなのにつて
話してる。

工藤君が・・・

彼女だから？

親公認の仲の子だから？

その子だからなの？

工藤君。

その子だからそんな優しい眼差しで彼女を見るの？

その子だから優しい声で・・・

日本語でもわかるよ。

とっても優しい口調だったことくらい。

「よっしゃー！」

いきなり工藤君が叫んだ。

どうしたの？なにがあったの、クリス！！

彼女が僕らが日本に行くとき、一緒に帰るみたい。

うそでしょう！？

信じられない！

どこまで運が悪いの？私。

嬉しそつに声をあげたんだよ。でも・・・

でも！？

でも言葉に私は少し、期待をもってしまった。

なんか彼女他の男に好かれてるみたいで・・・
工藤君がやきもち妬いてるらしい。

—— やきもち・・・？ ——

で、彼女はかなりの鈍感みたいで、
アプローチとは気付かず、
一緒に話したりしてるみたいで・・・工藤君、
相当怒ってる。

ただそれだけで？

話してるだけで怒るの？

鈍感って・・・リーナみたいね。

エレナが呆れて言う。

鈍感じゃないもん！！

リーナに言われても説得力は無い。

独占欲強くな？工藤。

っと笑い話になった。

だが。

・・・あ。

どうした（の）？

ダッド、エレナ、リーナ、そして私は

声が重なる。

い、いやなんでもない。

隠すのがへたなクリスは、嘘をついているのが見え見え。

ほら、言いなさいよ。

隠していてもなんの価値にもならないわよ。クリス。

そっだよ！言っちゃったほうが、スッキリするって！

言え！クリス！！

・・・本当に言い？

勿論！！

ちょっと気が引ける思いで開いたような口から

出した言葉は私にとってあまりに衝撃的なことだった。

工藤君、彼女に遠回りのプロポーズをしてる。

えー！？

私以外は声を出した。

なんか、一生居てくれとか、もう放さないとか・・・

工藤君、言うわね。

いつか私も言われた〜い！

工藤がそんなことを・・・？

ダッドが信じられないとつぶやく。

私だって信じられないわよ！！

ぷっ。

クリスが笑った。

どうしたの？

あの2人。どっちが幸せ勝手競ってる。

ばかか・・・

少年なのね、工藤君。

工藤君、かーわいゝ♪

工藤君を見てみると、幸せそうな顔が目映った。

彼女もすっごく幸せそう。

あと、工藤君が、お前がいるだけで俺は幸せだって。

——ズキン。

どうしたんだろう。

最初から工藤君は好きじゃなかったはず。

どうして胸が痛むの？

—— あっ。

ふと2人の笑い声が聞こえる。

工藤君の時々見せる少年の顔。

私が好きな工藤君の一面。

私が好きな工藤君・・・？

あー・・・

そっか。

私、工藤君を知らないうちに本気で好きになってたんだ。

『恋』をしてたんだ。

そう確信すると、

突然涙がでてくる。

叶わない恋ってこんなにも辛くて悲しくて苦しいんだ。

涙があふれ出てくる。止めようと思ってもどうにもならない。

ジニー？どうしたの？？

大丈夫！？

おい、ジニー？

大丈夫。大丈夫よ。

とりあえず。向こうへ行こうか。

工藤君と彼女は一晩中はなしていた。

気付いたよ。

私は、工藤君を恋愛対象として、

外見なんか関係なく、

工藤新一という人物が

— すと —

第14話 ドッキリ!? ジーpoint otview (後書き)

桜桃「さ、次回はやっと、浩二君が出てきます。」

浩二「やっと・・・」

桜桃「本当は痛い目にあうから出さないように
してたんだよね。
話がすすんで新一が・・・
ってなったら身も心もスタスタだし・・・」

浩二「え？」

桜桃「なんでもありません！
じゃ、次回!!」

第15話 ドッキリ!?!前日(前書き)

浩二視点です。

お楽しみください♪

第15話 ドッキリ!?前日

「ええー!?!?」

鈴木さんの声が教室中に響き渡る。

「しー!!」

毛利さんの言葉を合図に皆は毛利さんと鈴木さんのところへ群がった。

「どうしたの?」

「鈴木、言うんだ!」

「蘭!なにがあつたの?」

「えーつと・・・」

「ちょー驚きよ!」

言いくそな毛利さんをよそに鈴木さんは喋る。

「なにが!？」

「蘭が新一君の居るロスへ行つて、新一君と留学生と共に帰ってくるんだって!!」

「クラス全員）ええーーーー!!!!」

嘘だろ!？

毛利さんの顔を2日、見れないなんて・・・

「出発日は!？」

「え!？次の国語が終わったら・・・」

「つてことは毛利は早退かよ。」

「まあまあ。ラブラブだからしょうがないのよ。」

皆はうんうんと頷き、納得する。

だが、

俺は納得できない！！

工藤がどうだって訳ではないが、目の前でイチャつかれるのは

イヤなのが事実。

そももって、工藤が怖いって訳でもない。

だが、ゆっくりと毛利さんの顔を見れるのは次の国語で最後。

「はあ。」

「残念だったわね。松田君。蘭が心変わりしなくて。

ま、あの2人の間に入ろうなんて考えるのは、

2人の歴史を知らない奴か、よっぽど馬鹿なやつくらいよ。」

その言葉にムツとした俺はついつい売り言葉に買い言葉。

で返してしまった。

「どんな歴史があるっていうんだよ！

幼馴染って聞いたが、ただ一緒にいる時間が多かっただけだろ？

そんなのこれから知り合ったって遅くないことだし。」

「バカじゃないの？」

「は？」

「だから、バカじゃないの？ アンタ。

たった18年間一緒にいるだけであんなに深い絆がつくれる訳がないじゃない！

あの2人には半年間という長い歴史で深い絆をつくったの。」

「たった半年で？」

バカにした俺の口調に怒ったのか鈴木さんは眉間にシワをよせ、

話し始めた。

「たった半年？ 確かに言葉どおりに解釈するとそういう言葉がでてきてもおかしくないわ。

たった18年つと言ったそばで

半年って言葉がでてきたんだしね。

でも、たった半年もあの2人にとっては

5年も10年もの歴史なのよ。」

俺は言っている意味がわからなかった。

「あの2人がお互いをどれほど必要としているかがわかった時期がその半年間なの。その半年がなかったら

今の2人は居なかったかもしれない。

ってくらい2人の人生を左右する半年だったってわけ。

だから、たった半年。だなんて解釈してほしくないのよ。
その半年は2人の悲しく、でも嬉しい。いろんな思い出が刻ま
れている

時期なんだから。」

「2人にはなにがあっただ？」

「それは言えない。

でも、これだけは言える。

2人がお互いを嫌いになるなんてありえない。

2人が別れるときはどちらかが死んだときじゃないかしら？

あと、言っておくけど、これ以上蘭達の邪魔すると3年B組全員を
敵にまわすことになるわよ。ついでに言っと、先生もね。」

「せ、先生も・・・？」

「そう、先生も認める名物夫婦なんだから。」

名物夫婦・・・

おれの頭の中をぐるぐると駆け回っている。

そして、毛利さんは空港へと向かった。

「いやー、毛利やったな。」

教師が満足げに言う。

「先生！次は先生の数学でしょ？」

あのことについて、松田に言ってやりましょーよ!」

「良い!」

「よし、松田。心して聞けよ。」

「は、はい。」

俺は訳もわからず頷く。

諦めたなんて言ったらうそになるが、もう、あの頃のように奪ってやるうなんていう気力がない。

「あのな、工藤と毛利が帰ってきたら・・・」

「一同」2人のラブシーンを隠しビデオにとったものを校内の朝会で暴露する!!」

「は?」

「新一君のおば様に頼んだのよ。
久しぶりに会った2人の一番のラブシーンのビデオを送って
くれって!」

嬉しそうに話す鈴木さん。

「いやゝ工藤と毛利も幸せだよな、俺たちみたいな友達がいて!!」

「そうそうないよね。1年生から3年生かけてみんな冷やかすんだ
よ!？」

「しかも、先生も!」

「校長もだよな!!」

わきあいあいの様子で皆は話。

「あ、そうだ。」

後藤が俺に向かって話し始めた。

「もし、毛利と工藤の間を入ろうとするんだったら俺たちは止めはしない。

そのかわり、帝丹高校生徒＋（プラス）教師を敵にまわすぞ。」

どっかで聞いた台詞をくぎに刺されたように言われた。

「ま、あの２人のことだから、お前が入ったところで、どうってことねえ

だろうけど。」

「まあ、今まで工藤君に立ち向かった子なんて居なかったしね。」

「でも、下級生の佐藤君！工藤君に向かって

「工藤先輩より毛利先輩を幸せにできます！」

て言ったらしいよ。」

「命知らずだな。」

その後、どうなったかというと・・・

「でも、工藤君の怖さを知ったらしく、すぐに退却したんだって！そして転校したってさ。」

「でも、私から見て、新一君は本気はだしてなかったわよ。」

「え？園子見に行つたの！？」

「あつたりまえよ！この園子様が行かなくてだれが行くというのよ！！」

「た、たしかにね。」

「ま、新一君が本気でしたらあの程度じゃ済まされないわよ。もつとこゝ・・・殺気？つてのがすごいし。」

「確かに！」

「あの工藤が取り乱すところ。見てみたいもんだよ！」

「原型の新一君がわからなくなるわよ！」

わははははと笑っているが、

本当にそれで済まされるくらいだろうか。

正直、俺には笑えない。

工藤新一。

新聞やテレビでは見たことがある。

頭のきれる高校生。

平成のホームズ。

日本警察の救世主と言われる男。

その救世主が学校全体の生徒に冷やかされている。

一体どんな奴なんだろうか。

俺のなかで興味が湧いてきた・・・

第15話 ドッキリ!?前日(後書き)

浩二「興味が湧くのと同時に寒気も・・・」

桜桃「新一が今ごろどうやって絞めるか
考えてたりして♪」

浩二「嘘だろ？」

桜桃「新一は蘭のことになると
作者のことを無視して暴走するから」

浩二「・・・」

桜桃「まあ、そのときは、運命だと思って！
腹をくりなさいな♪」

浩二「転校しようかな・・・」

桜桃「まあ、大丈夫よ！！
死にゃあせんって！
ま、ひどくて全治2カ月くらい？」

浩二「に、2カ月!？」

桜桃「2カ月なんてあつという間だよ！
大丈夫、大丈夫♪」

次回も見てください!!

第16話 新婚気分（前書き）

楽しみにしていってくれる方々が
私の宝物です♪

第16話 新婚気分

「新一！早くしないと遅刻よ!!」

「あゝねみい・・・」

「ほら、起きた起きた!」

「まったく、新ちゃんったら蘭ちゃんが来た途端にだらしなくなちゃって。甘えたいのかしら?」

有希子は冷やかすように新一を見る。

「う、うるせえな。しょうがねえだろ。」

「あら、認めちゃった。よかったわね、蘭ちゃん。」

「え?あ、あの・・・その・・・」

どろじよう・・・

つと内心慌てる蘭。

「そんな慌てなくても・・・

あ、もうこんな時間！！新ちゃん、蘭ちゃんの朝ご飯は抜きね。」

「は！？寝坊したからって、そりゃあねえだろ！！」

「新ちゃんが悪いのよ。自業自得。着替えたら早く行ってちょうだい。」

「いやだね。遅刻しようが朝飯は食う。」

つと慌ててご飯を食べ始める新一。

「あらあら。蘭ちゃんのご飯1つくらいで・・・
それだけ蘭ちゃんがすきってことかしら？」

「そういうこと。」

あっさり認めた。

「えー！おもしろくない！！

新ちゃん、もうちょっと慌ててよ！」

「おば様・・・」

「もー、新ちゃん可愛くない。

あ、そうだ

蘭ちゃん、新ちゃんの服もってきてくれる？

ごめんね。」

「いえ、こっちに居させてもらってるんだから

それくらい喜んで引き受けさせてもらいます！」

「ほんとー？嬉しい。

でも、私はいつでも蘭ちゃんなら大歓迎よ！

新ちゃん抜きでも来てもいいんだから！」

「はい！」

「勝手に話すすめんな。こっちに蘭が来るときは
おれも来るに決まってるだろ。
1人で行かせるか！」

「まあ、うつとおしい独占欲。」

「うるせえ！」

「蘭ちゃん、疲れない？こついう男。」

「た、たまに・・・」

「母さん！蘭も納得するな！！」

2人とも、新一をいじめて楽しんでいる様子。

着替えた新一は早速学校へ。

「じゃ、行つてくつから。」

「うん。いつてらっしゃい。」

「いつてきます。」

ボタン。

「きゃー！！新婚さんみたい！
蘭ちゃん。ドレスは私に選ばせてね！

アクセサリーは英理ちゃんにまかせといて・・・
式は・・・ああ、どうしよう！迷っちゃう！！」

「式って・・・私達は・・・」

「蘭ちゃんは新ちゃんと結婚するのいや？」

「い、いえ！とんでもない！！」

「だったらいいじゃない。」

「でも、新一は・・・」

新一の気持ちがどれほどかわからない蘭は少々不安。

「新ちゃんは逆に蘭ちゃんがいやなんじゃないかって
悩むと思うわよ。」

「そ、そんなこと・・・！」

「新ちゃんと蘭ちゃんは自分たちのことになるって鈍いから。知ってた？新ちゃんね、幼稚園のころから蘭ちゃんが好きだったのよ？」

「コナンちゃんになったときも、蘭ちゃんのことばかりで。」

「え。」

「蘭ちゃんはいつから新一を？」

「気付いたのは高校生のときから。でも、その感情は小学生の頃からです。多分、恋だっけ気付かなかったのかも。」

「そっか。なーんだ、新ちゃんに片思いがあっただんだ！おもしろーい！！」

「きやはきやはと笑い転げる有希子。」

「お、おもしろい？」

「だ、だーって、自信満々な息子が片思いよ！？
それに、高校生探偵の工藤新一が片思い！！
ファンの子が聞いたら驚くわよー！！」

「た、確かに・・・」

「でも、そんな新一が好きになったのは蘭ちゃんよ？
幼稚園からずっと好きだなんてそうそうないし、
それに、あの新一が蘭ちゃん1人で性格が180度変わるの。
知ってた？それだけ蘭ちゃんは愛されてるってことよ。
もっと自信をもって？」

「はい！」

—— その頃、新一は。

「やっぱ、蘭の笑顔を見て出かけるのが一番だよな。
それに、夫婦みてえだったし・・・」

つとにやけながら学校へ向かったのだった。

第16話 新婚気分（後書き）

ダッド な、なあ、今日の工藤気持ちわりくらい
幸せオーラただよわせてんだけど。

エレナ 昼食のとき、ずっと上の空だったわね。

リーナ 彼女のことでも考えてたりして！！

ジニー「硬直」

エレナ ちょ、ちょっと、リーナ！

リーナ えー？

桜桃 あーあ、ジニー怒りマークが1、2、3・・・
8個もついでる。

蘭に危険が迫ってるのは
そう長くないかも！？

第17話 作戦

あと一日で日本へ。

どうにかしなければ。

くっど〜

どうした？ダッド。

いや〜？愛しの彼女を考えているのがまるわかりだぜ？

・・・マジ？

ああ。幸せオーラ炸裂。

いや・・・今日いいことあつて。

なんだなんだ！？

学校行く時に好きな奴の見送り。
新婚気分だったぜ。

どこまでずっとおいしいのよ。

あの女。

私の工藤君を見送り・・・

さっさと日本へ帰りなさいよ！

たしかに、美人だっことは認めるわよ！

スタイルも良いし・・・

どうせ・・・どうせ外見だけの女じゃない！

いい気にならないでよ！

なにかもマリアにそっくり。

長い髪に優しそうな瞳。

でも、化けの皮をはがせばとんだ悪魔よ。

どうせ女なんてそういうもんなのよ。

お、ジー！

はい。ダッド。工藤君。

こんにちわ。

そういえば、
なんで工藤君って他の女の子のは紳士なのよ。
私達、友達でしょ？もつと力抜いてよ。

そうか？俺、母さんと蘭と園子と灰原以外の女には皆
こうなんだ。

園子？

ああ。蘭の親友。灰原は俺の相棒。

2人して俺たちのこと冷やかしゃがって・・・

俺たちのこと・・・

灰原さんっていう女も・・・

園子っていう子もいる。

たしかに、彼は有名人だもの。

周りに女がいるくらい知ってる。

その彼が蘭という女を選んだ。

それほどの価値があるような女には見えないが

いずれにしても、邪魔なことには変わりはない。

工藤君を手に入れるためならなんでもする。

本格的に作戦を練って早いうちに実行しなきゃ・・・

第17話 作戦（後書き）

桜桃「きゃー！なにこの女！

なんとしても蘭を守らねば・・・」

友A「だったら最初からジニーの性格を変えれば
よかつたじゃない。」

桜桃「私が考えたのは昔のジニーの性格だったの！
だんだん出演者が暴走してつたの！！
私のかく出演者は暴走するから・・・」

友A「だったらしょうがない。」

桜桃「・・・」

蘭に危機到来！？
次回を見てください

第18話 実行

今日中になんとかすれば・・・

1日しか私にチャンスはない。

あ！そうだわ・・・

この手があるじゃない。

くっどぅくゝん
♪

ジニーちゃん。

あのね、実は、彼女が今日、このホテルの201号室に
来てくれたって。転校生の話だって。

なんか、告白されて戸惑ってるみたい。

家でもいいのに・・・

家にお母さんいるでしょ？

話ずらいんじゃないかな。女の子ってそついう生き物だから。

わかった。行ってみるよ。

放課後。

工藤君。このアメあげる。

サンキュー！。

じゃ、がんばってね。
彼女を支えてね！！

ああ！！

これで、準備完了。

その頃新一は、ホテルに着く。

だが、睡魔に襲われ、寝た。

えっと、201号室。

ガチャ

工藤君？いる？
寝てる寝てる。

ジニーは上半身だけ新一の服を脱がせた。

そして、誰かにメールを送った。

相手は

コンコン

蘭。

来たわね。

はあゝい。

「え？」

ガチャ。

あら、彼女さん・・・

ど、どうして？

言ったほうがいいかしら。工藤君の彼女だものね・・・

実はね、私、工藤君とメイクラブ・・・したの。

私はね、彼女もいるからいやって言ったのよ！？

でもね、工藤君がいいからって・・・私も工藤君が好きだったから

それ以上拒めなくて・・・彼、彼女と相思相愛みたいだし、

疑われないとも思ったんだと思うけど・・・

ごめんなさい！

大粒の涙。

勿論、うそ泣き。

そ．．．うだったんですか．．．
あまり、落ち込まないで下さい。
貴女が悪いんじゃないありません。
じゃ、新一に伝えてもらえますか？一足先に
帰るって。じゃ。

足をふらつかせながら帰った蘭の背中を見送った。

いい気味。

これで、工藤君は私のもの。

外見だけの女に幸せなんて訪れないのよ。

私みたいに努力をせずに綺麗な女なんて

ろくでもないわ。

マリア、そしてダニエル。

そろそろ目の前に現れてもいい頃かしら。

外見だけの人間は敗北が待ち構えているのよ。

それを

思い知らせてやるんだから。

第18話 実行（後書き）

桜桃「暴走してしまったー！！

なんとかしなければ・・・」

友B「うるさい！静かにしろ！」

桜桃「は、はい。すみません・・・」

友B「周りの迷惑を考えてから声に出せ。

大声で言われたら腹が立つんだ。」

桜桃「こ、今後気をつけます。」

友B「それでいいんだ。」

桜桃「なんで態度がでかいのさ・・・」

友B「イラつく女をやってみた 笑」

桜桃「あ、そう・・・」

私の日常は変な人ばかりです・・・

第19話 再会（前書き）

とうとう、

マリアとダニエルに再会！？

第19話 再会

私は、工藤君の服を再度着せ、

起こした。

工藤君！！

ん．．．？蘭は？

わからない。でも、なんか転校生から電話がきて、
すっごくうれしそうしてたの。

彼氏がいるのに、他の男と話してていいの？
って聞いたら．．．

新一は私を信じているから浮気しててもばれないんだって。

それで、むかついたから追い返しちゃって．．．ごめんなさい！

！

こころでも噓泣き。

・・・いいよ。ジーちゃんが悪いんじゃないんだからさ。

で、でもね。帰るとき、先に日本に帰るって言ったの・・・
私、本当に余計なことしたよね！？

いや、大丈夫。大丈夫だから。

罨にはまったわね、工藤君。

ほら、やっぱり努力をせずに幸せをつかもうなんて

そんな甘い話とおらないのよ。

ね、こんなときに悪いんだけど、
私の彼氏役してくれない？勿論、
一回だけだから。

・・・わかった。いいよ。

ほんと！？ありがとう。

これで第一段階はクリア。

早速、本題に入ろうかしら。

—— カフェ。

カラン

久しぶりね。マリア。ダニエル。

久しぶり。卒業してから会えなかったから

さびしかったわよ。

本当、いきなり別れを告げて悪かったよ。
でも、やっぱり別れなきゃよかったってすぐ後悔した。

・・・

嘘は対外にしたら？そんなこと思ってないくせに。
知ってたの。2人が私を嫌いだったって。

え？

私みたいな子。嫌いなんですよ？

私はマリアを手に入れる道具なんですよ？

な、なんのこと・・・？

とぼけないで！私、聞いちゃったのよ。

2人が友達と話しているとき。

信じてたのに。でも、私はダニエルと別れられてよかったわ。
おかげで素敵な彼氏もできたし。工藤君！

カラン

さあ、2人はどんな顔をするかしら？

第19話 再会（後書き）

友C「聞いて！B 友B がね、うざいって言うの！！」

桜桃「あー．．はいはい。」

友C「なに、その態度．．．」

桜桃「ごめんごめん。でも、Bだからしょうがないよ。」

友B「君が私を語るな！」

桜桃「ご、ごめんなさい。」

友C「Bのばかー！！」

友B「精神年齢5歳！」

友B・C「ギヤーギヤー！！」

今日も間に挟まれて．．．
自分にご苦労様と言いたい．．． 笑

第20話 真相（前書き）

真相とは！？

第20話 真相

工藤く・・・

え――。

な・・・ん・・・で・・・？

工藤君は

彼女を連れてやってきた。

帰ったはずじゃ・・・

悪いな、全部芝居だったんだよ。

し・・・ばい？

ああ。実は、ジニーちゃんの過去はダッドから聞いていたんだ。
それで、一足さきにこの2人に会った。

この2人とはマリアとダニエルのことである。

詳しい内容は2人から聞いた。
実はな、すべてジニーちゃんのためだったんだよ。

私のため？

なになが私のためだったというの？

バカにすることが？

バカにすることで私が強くなれるとでも？

2人は、ジニーちゃんを嫌っていない。

どういう意味？

だったら、なんで

なんであんなこと言うのよ。

私が・・・全部話すわ。

マリアが前へ出てきた。

私とダニエルは、兄妹なの。

え？

きよ・・・う・・・だい？

私、教室でジニーの話をしたとき、あの場所にジニーがいる知ってたの。勿論、ダニエルもいると知ってたわ。

じゃ、なんでー！

私たちの親ね、麻薬の売人だったの。

え――。

ジニーに話すことはどうしてもできなかった。
軽蔑されちゃうと思ったから。もう、警察にもばれてて、逮捕状もきてたの。

このままじゃジニーにも被害がでると思った。だから、
ジニーを傷つけることになるけど、嫌われてもらおうと思った。
軽蔑されるより嘛だと思った。

だから……だから……ごめんなさい！

うそ・・・でしょう？

うそじゃない。これが真実なんだ。

工藤君がくぎをさすように言った。

私の身体は勝手に動いて、マリアの前へ。

バシッ！

私はマリアを殴った。

そんなの、そっちの勝手な判断でしょ！？

ばっかじゃないの？私がそんなでマリアを軽蔑するわけないじゃない。

親は親。マリアはマリア！！本当の友達なら、そんなことで軽蔑しないわよ！

ダニエルもダニエルよ！否定してよね！マリアの考えは間違いだって

少しも思わなかったの！？

ごめん。ごめんね。ジニー・・・本当に・・・

悪かった。

なっているマリアを見た途端思った。

私のため・・・だったんだよね・・・

私のことを・・・考えてたのよね・・・

私が2人の立場だったらそうするかも・・・

私はそれ以上責められなかった。

しょうがないから、今話題のケーキをおごってくれたら許すわよ。

あ、ありがとう・・・。

ごめんよ。本当に。

だから、いいわよ！許すって！だって、親友でしょ？私たち。

！！！！！！

私は工藤君と彼女さんのほうへ駆けた。

工藤君、彼女さん。ありがとう。そして、ごめんなさい。

大丈夫です。だって、一番辛かったのは、ジニーさんと
マリアさんとダニエルさんでしょ？

・・・ありがとう。

ま、そういうことだ。明日もよろしくな！

もちろん！

あ、ジニーちゃん。って呼んでもいい？

いいよ！日本ではよろしくね、蘭ちゃん！！

うん！

私は笑顔でマリアとダニエルの元へ駆けていった。

第20話 真相（後書き）

後書き

蘭「よかったね。」

新一「ああ。」

桜桃「元のジニーに戻ったしね。」

蘭「うん！日本に帰って、園子にも紹介してあげるんだあ。」

新一「日本・・・松田浩二・・・。」

桜桃「ギクウ！！」

新一「勿論 邪魔はしねえよな？そいつ。」

桜桃「う、うん・・・ 勿論って聞こえたのは気のせい・・・？」

第21話 帰国

やっと到着。

3日ぶりの日本だ。

どれほどこのときを待っていたことだろう。

あいつに会いたかったから。

そう、

—— 松田浩二。

さて、どうするか。

とりあえず、帝丹高校に行くだろ。

そこから、松田を見つけ出して、呼び出して・・・

よし、これでいっけ。

「新一！夜はハンバーグだからね！」

「おお！」

ジニーちゃん！園子っていう友達紹介するね！

うん。よろしく！！

かなりとこの2人は仲良くなった。

園子の代わりができたような感じがする。

「らん！」

「園子！！」

「よ、工藤。」

「向こうで美人な友達はできたかな？」

「浮気は悪いですよ。工藤君。」

後藤は女の真似をしているつもりらしい。

「ふざけんな！」

「おっこらないでよ。工藤く〜ん。」

「きもちわりい！！」

「ひでえ！！」

俺たちは馬鹿騒ぎをしていた。

そこになかなか入り込めない男子が一名。

ふ〜ん。

こいつが松田か。

俺が松田に声をかけようとした。

だが、

「新一君！ちょっといい？」

園子がすごい剣幕でこっちへきた。

さっきまで蘭と楽しく笑顔でおしゃべり。

って感じだったんだが・・・

その面影はない。

「あ、ああ・・・」

園子の顔からして、他の男だったら

殺されるだろう。っと思うことだろう。

俺は大丈夫だな。

「新一君。」

「なんだ？」

「松田浩二。っていう子がいるでしょ？」

「ああ。」

「私達はくぎをさしておいたからね!!」

「は？」

「ちゃんと、蘭には新一君がいるって言ったし、間に割り込んだら帝丹高校全校生徒を敵にまわすって言ったし!もし、松田君が蘭を取ろうとしても、私達に否はないわ!!」

「なにが言いたいんだよ。」

「え?えーっと、つまり、私達は悪くないの!松田君が悪いんだからね!わかった?」

言いたいことだけ言って、園子はいなくなった。

ようするに、松田がなにしても自分たちにあたるなってことだろ？

最初からそう言えばいいじゃないか。

俺は木にもたれた。

そして、

松田の元へ行くために、

足早にみんなの元へ戻った。

第21話 帰国（後書き）

桜桃「どうして、あんなこと言ったのさ。」

園子「だって、松田君が言うこと聞かないで
蘭をくだいちゃって、新一君の怒りが爆発しちゃって、
なんで、やめろと言わなかったんだって言われたくなかった
から……」

桜桃「へえ〜でも、そう言われてもそのとき
ちゃんと言ったといえいいじゃない。」

園子「一回怒りが爆発したら、他の人の言葉に耳をかしそうに
ないもの。」

桜桃「なるほど。」

美帆「バカだよなー工藤新一って。」

園子「誰!？」

桜桃「美帆!勝手にきちやだめ!あんたの出番はまだ後!」

美帆「え?そうなの?じゃ、ばいばい。」

園子「今の……だれ?」

桜桃「えっと、ちがうお話の視点の子。」

園子「私、知らないけど。」

桜桃「これから書く予定だからね。」

園子「あ、そうなの。ま、がんばってね。」

桜桃「うん・・・期末テストがあるけど、がんばる・・・」

園子「え！？小説かいてて大丈夫なの？」

桜桃「多分・・・」

第22話 諦めは肝心。

とうとうこの日が来た。

工藤新一に呼び出される日が。

「で、僕に何のようが？」

「それはお前がよくわかってることだろ？」

そうきましたか。

「さあ？僕にはなんのことだか。」

「とぼけんじゃねえ。」

つと言いたいところだが、忠告したかっただけなんだよ。」

「忠告？」

忠告・・・

俺の女に手をだすな。

とか？

毛利さんには俺がいる。

とか・・・

そんなことか？

「蘭はああ見えてー・・・
やっぱやめた。」

なんだよそれ。

「この続きが聞きたかったら・・・空手部へ顔をだしていよ。
おもしれーもんが見れるぜ?」

「おもしろいもの?」

「ああ。お前が好きなやつ。」

そっつい、工藤は姿をけした。

俺が好きなもの？

俺が好きなものつつたら、

あんぱんだろ。

フルーツ牛乳に、きつねうどん・・・

ハムサラダ・・・

毛利さん。

そして

「まさか、毛利さんが？」

ははは。そんなわけではない。

あの、清楚で可憐な毛利さんが空手部になんのようがあっていくと
いうのだ。

鈴木さんが空手部で・・・

ってことはないか。

彼女はテニス部だし・・・

あ、友達が空手部とか・・・田島さんがたしか空手部だったよな。

そっか。

そういうことか。

でも、なんであいつは、空手部にいけと・・・

とりあえず、行ってみるか。

くくく 空手部 活動場くくく

「はー!!ー!!やー!!ー!!」

「ここになにがおもしろいものがあるって・・・」

おれは衝撃的なものを見てしまった。

「も、毛利さん……？」

空手着を身にまとった毛利さんがいた。

「あ、松田君。どうしたの？」

「いや、工藤君に呼ばれて・・・」

「新一に？どうしてそんなこと・・・」

俺は思った。

工藤は思い知らせたかったのだろう。

俺は上っ面の毛利さんしか見ていない。

毛利さんの表面上だけを見て好きになったのだと。

俺は決断した。

転校する。

毛利さんへの恋が叶わないとわかった今。

ここに意味はない。

甘い親父のこと。俺が転校したいと言えば転校の手続きはしてくれる。

転校先で新たな恋を見つける。

それが次の

目標^{かだい}だ。

第22話 諦めは肝心。(後書き)

あと、

2話くらいで終わるかな??

今日中に終わろうと思います!!

桜桃

第23話 転校

「えー、このたび、転校することになりました。皆さんとは4日という短い期間しか一緒に居られませんでした。とっても楽しい思い出となったと思います。ありがとうございました。」

「まっつ！遊びに来いよ！！」

「今度はどこに引っ越すの？」

口々に浩二に聞いていった。

「んー、とりあえず、北海道かな。」

「北海道かよ・・・」

「旭川辺りに行こうと思ってる。」

「別れんの、寂しいな。」

寂しいと口々に言い合う。

だが、

工藤の天地の怒りが舞い降りてこなくてよかった・・・

っと誰もが思っていたのだ。

「4日間、ありがとう。」

「元気でね！」

「たまには顔出せよー！」

「ひんぱんに出せるわけねえじゃん・・・」

いろいろとあったが、帝丹高校は楽しかった。

つとしみじみ思う浩二。

色紙には、

”いつでも遊びに来てね。

毛利蘭”

ありがたい。

本当なら転校したくない。

だが、叶わぬ恋を目の辺りにしたいとは思えない。

浩二は転校することを選んだ。

そして、毛利さんの横に書かれた

一文。

” お疲れ。

工藤新一
”

お疲れ。か。なにについてだろうか。

皆は大体、予想がつくことだろう。

俺は、

皆に見送られながら旅たった。

勿論、

工藤と毛利さんの夫婦姿を

目の辺りにしながら。

第23話 転校（後書き）

浩二「もしかして、これで出番終わり？」

桜桃「もちろん。」

浩二「ガクッ」

桜桃「新一が暴走しなければこうはならなかったんだけど・・・」

浩二「はあ。」

桜桃「でも、一回だけチャンス。あるよ？」

浩二「え！？」

桜桃「でも、一言二言しか言わないかもしれない・・・」

浩二「それでも出れるだけいいや！」

桜桃「ああ・・・そう？」

じゃ、今後、浩二が出てくるよう祈ってやってください。

勿論、浩二がお嫌いな方は出てこないよう、祈っても結構です。」

浩二「え？」

最終話 高校3年

「新一と付き合うようになってもう、1年も経っちゃったんだね。はいな。」

「そうだな。あ、蘭、今日、おっちゃんは？」

「麻雀という名のお仕事です。」

「じゃ、ちょっと付き合ってほしいところがあんだけど。」

「どー？」

「着いてから。」

教えてと何回言っても

教えないの一点張りの新一。

「どこ行くのー?」

「・・・ここだよ。」

着いたのは、米花センタービル展望レストランことアルセーヌ。

「ここって……」

「ああ、ここだよ。」

あ、予約してた工藤です。」

「工藤様ですね。ご案内します。」

私は不思議だった。

どうして、こんなところに？

あ！また、おじ様のカードを勝手に……

ってことは、ないわよね？

「蘭、好きなもの選べよ。」

「ねえ、おじ様のカードじゃないわよね？」

「あ？ああ、食事代は父さんのけど・・・」

「もう、また勝手に・・・」

「いいからいいから。」

私は半分強引に食べさせられた。

でも、とっても楽しかった。

なにより、新一と恋人になって、私も新一も素直になっている、

幸せな一時なんだから。

「蘭。」

「なに？」

「えーっと、そのー。」

「なによ。はっきり言いなさいよね。
1年前と変わらないわよ。」

「だから、その・・・俺と・・・」

「俺と？」

「結婚してくれねえか？」

「え。」

「俺の、妻になってほしい。」

「私で・・・いいの？」

「勿論。小さいころも、コナンになったときも、そして今も、蘭以

外考えらんねえよ。」

「私で、いいなら、喜んで……お受けします。」

「……よかった。これ、無駄になんねえもんな。」

「？」

新一が、目をつぶれと言った、私はつぶった。

いったい、なにをされるのだろうか。

「いいぜ。」

目の前には、私の手が。

とくに変わったところは・・・

あった。

薬指に。

光る、ダイヤモンドが。

「蘭に似合うと思ってさ。」

「ありがとう。大切にするね！」

パンパンパンッ

クラッカー！？

ここ、レストランよね？

「おめでとう。蘭。」

「園子・・・？」

「園子、ここ、レストランだぞ？」

「大丈夫。お客は全部うちの者だから。」

「うちの者？」

「そ、コックも客もなにもかも、うちの執事やメイドやらだから。」

驚いた。この数全員、鈴木家の・・・？

「蘭。よかったね。本当に。本当に・・・」

「うん。ありがとう。園子。」

「うん・・・うん・・・」

いつも、からかって、楽しんでる園子。

でも、いつだって力になってくれて、私を信じてくれて、

なにより、一番応援してくれたのは園子。

「新一君、蘭を幸せにしないと、私が取っちゃうからね。」

「わかってる。」

「まったく、メガネのガキンチョのとき、もっといじめとくべきだったわ！」

「なんだと！？」

2人はいいあいをする。

この風景が私は一番好き。

「まあいいや。おじやまな私たちは消えるから。
今日はここ、貸切なの。好き勝手やっていいわよ。」

そして、帰り際に

「蘭、ファイトだよ。」

私、ほんと、いろんなひとに感謝しなきゃいけない。

新一のお嫁さんになるんだもん。

世界一幸せにならなきゃね。

最終話 高校3年（後書き）

園子「結婚式には美帆ちゃん呼ぶの？」

桜桃「浩二は呼ぼうと思うんだけど、美帆はどうしようかな。」

蘭「私は呼びたいな。」

桜桃「ま、蘭がいいならいいけど。」

新一「松田を呼ぶのか？」

桜桃「いいじゃん！2人は結婚するんだし。」

新一「でもよ……。」

桜桃「こそつ　蘭ちゃんのドレス姿見られるのがいやなのは
通用しないからね？」

新一「……。」

蘭「いいんじゃない？松田君くらいなら。
ね、新一！」

新一「あ、ああ。」

桜桃

つてことで、美帆と浩二は呼ぶことにしました。
よかったね、美帆！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5988/>

みんな恋してる。

2011年10月7日03時47分発行